
できん相談 笑えん冗談[番外]

56

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

できん相談 笑えん冗談「番外」

【Nコード】

N9747I

【作者名】

56

【あらすじ】

BL小説『できん相談 笑えん冗談』の番外編です。本編をご存知でない方には少し分かりにくいと思います。ボーイズラブ要素の15禁ですので、年齢に満たない方、苦手な方、義務教育中の方はご遠慮下さいませ

接触感染（上）（前書き）

今後「できん相談 笑えん冗談」の番外は全てこちらにまとめさせて頂きます。

ボーイズラブ要素の15禁小説です。苦手な方、年齢に満たない方、義務教育中の方はご遠慮下さい。いかなる苦情もお受けいたしかねますのでご理解下さい。

接触感染（上）

「ほんなら鳴砂君は、タカヒコと一緒に住んでるんかあ」

「はい。運転手する代わりに居候させてもらってます」

バックミラー、後部座席に座る男にチラチラと視線を送りながら、鳴砂は青信号を確認してアクセルを踏み込む。

ジャガーXJのエグゼクティブ。4・2？のV8エンジンが唸りをあげて、スムーズに加速を始めた。

「で、仕事は？ タカヒコのところの、あの風俗店か？」

「いえ……、今は無職です。そろそろバイトくらいは始めようかなあと思ってます」

「なんや。可愛らしい顔してるから、わしはてっきりあの子かと思うてたわ」

適当に作り笑いをバックミラーに反射させていると、さっきから口数少なく助手席で仏頂面をしていたヤクザが、ダルそうに首を鳴らして足を組みなおした。

真新しい画面のカーナビが目的地周辺を告げる。

「堅気の子を捕まえて運転手させる上に、身の回りの世話までさせるなんざ、お前もずいぶん偉なつたもんやのお。タカヒコ。」

さすがに島田の若頭が世話になったと挨拶にくるだけの事はあるがな

ニヤニヤと笑っているのが声で分かる。

後部座席に座って紫煙をくゆらすのは墨元組五代目若頭の矢木。

助手席に座る、タカヒコと呼ばれた男がその補佐役で九鬼。

ある一件から、鳴砂は現在九鬼の運転手兼恋人をしている。

その事件の時に島田組若頭の木場から盗んだ金を、海外の博打に

注ぎ込んだ結果の一つが、この今乗っている高級車だ。以前鳴砂が乗っていたシボレーカマロと、九鬼が乗っていたレクサスは仲良く廃車にした。

本当なら買い換える新車はBMWの7シリーズが良かったのだが、九鬼は同じ車種に乗る東京の従兄弟の話を持ち出して縁起が悪いと嫌がり、ベンツのSクラスを推した。恋人になった分、極道相手に強気に出る鳴砂との話し合いはどこまでも平行線をたどり、結果どういう訳かジャガーXJの左ハンドルを購入する事で話が納まったのだ。もちろんカーナビに加え、交通法違反ギリギリの遮光度を誇るリアウィンドウのスモーク、それ以外もオプションは全てフル装備した。

矢木の意味ありげな言葉に、九鬼が正面を見つめたまま嫌そうに顔を歪める。

そんな九鬼に構わず矢木の話は続く。

「こいつは仕事以外ではガキみたいな性格やからなあ。一緒に住むんは大変やるお？」

鳴砂が迷い無く「はい」と答えると、右隣から鋭い視線が頬に突き刺さる。

「せやろ。ほんまにタツノにそっくりなんやあ、タカヒコは。何か面倒な事があつたら、いつでもわしの所に言うておいでや。鳴砂君」「そうさせてもらいます」

「矢木さん。俺がタツノに似てるんやのうて、タツノが俺に似てますねんで？」

面倒臭そうに九鬼が後部座席を振り返ると、矢木は「そうか」と穏やかに笑う。

年齢は五十前の白髪交じり。実に温厚そうな人柄なのに、どこか鋭く品格のある装いがこの男を極道なのだと教えていた。二日に一度の透析通いのせいで、支部事務所を任されているというのは肩書きだけ。実際に事務所をしきっているのは助手席の男だ。ほぼ隠居

同然の生活を送っているながら、老いを感じさせない気品のある雰囲気
に鳴砂は好感をもった。

ちよつとタイプかも。

バックミラーに映る隙の無いダンディズムに目線を吸い取られて
いると、助手席からお得意の舌打ちが飛ぶ。

「こんなに乗り心地のええ車やったら、病院の送り迎えは鳴砂君に
お世話になってもええなあ」

どこかわざとらしい矢木の言葉に、何を言い出すのかと九鬼が眉
をひそめてもう一度振り返る。

「矢木さんにはちゃんと護衛が出来る運転手を付けてるやないです
か」

「だからあいつは車ごとタカヒコにやる。下の者を付けたいと言っ
てたやないか。」

それとも何か？ 鳴砂君取られたら嫌な理由でもあるんか？

痛いところを突かれたヤクザが「それは……別に」と決まり悪く
言い、首を掻きながら前を向く。

バックミラーの含み笑いを見て、この男は全てを知っているのだ
と鳴砂は確信した。知っていて九鬼をからかい、面白がっている。

矢木は九鬼とは直接杯を交わした仲では無いが、タツノとこの男
を本当の身内のように世話を焼いて可愛がっていると電話番から聞
いたことがある。タツノに加えてこの男の世話まで焼くとは、計り
知れない心の広さだと鳴砂は感動した。

目的地のラウンジバーに到着して車を停めると、九鬼が助手席か
ら降り、ごく自然な振る舞いで後部座席のドアを開ける。

矢木が車から降りたのを確認してから、またエンジンをかけた。

九鬼が運転席に歩み寄って帰りの時間はまた連絡すると伝えると、
矢木が口を挟んだ。

「おい。せつかく来たんやから一緒に店に入れたれや」

「いや、矢木さん。こいつは帰りの運転があるから酒飲まれへんし……」
九鬼が渋い顔を見ると「ソフトドリンクくらいは置いてるやろ」と言つて、矢木は鳴砂に向かって窓越しに手招きする。
鳴砂が車から降りると「たまには豪華な食事して帰り」と、矢木は笑った。

地下への階段を三人で下りる。

『本日貸切』とプレートが掛かるウッド調のドアを開けると、中は想像以上に広かった。

半円を描くソファアームがいくつも並び、着物やドレスを着た沢山の女がスーツ姿の男達に酒を注いで寄り添っている。遠くから見てもわかるほどに、数え切れない作り笑いの群れが絵に描いたような接待パーティーを盛り上げていた。

鳴砂が通されたのは、運転手や付き添い役専用の席であろう一番端の小さなテーブル。

誰も座っていなかったが、料理だけはぎっしりと並べられている。サラダ、春巻き、ピラフにフルーツ。豪華ではあるが美味しそうとは言えない。

まあ帰って一人でコンビニ弁当食うよりはええか。

矢木は奥のVIP席に座り、ホステスを遠ざけて誰かと難しそうな顔で話をする。それを護衛するかのようには手前のテーブルで九鬼がグラスを傾けていた。九鬼のテーブルにはホステスが一人と、見るからに極道の男がもう一人。

鳴砂の席にはホステスどころかウェイターすら寄って来ない。金にならないと分かつている人間には誰も寄り付かないのか、それが逆に気を使うことなく食事が出来て良かった。

しばらく経つと徐々に店内が混み始めた。一人なのをいい事にく

つろいでいたが、ついに鳴砂のテーブルにも他の客がやって来た。三十代半ばに見える洒落たスーツを着た男。クロコダイルの靴にブレゲの腕時計。誰かの付き添いには見えない。

適当に話を合わせていると、どうやら男が司法書士だということが判明した。どうりで垢抜けているわけだ。

「僕もこういうパーティーは苦手ですねえ」

言葉とは裏腹に、さり気なく鳴砂の肩に回る男の腕。

男がわざわざこんな賑わいの無い席に来た理由を知って、鳴砂は気付かれないように店内を見渡した。九鬼に言っ、先に店を出て車の中で待っ……つもりだった。

ところが視線を向けた先の恋人は、驚いたことに両脇に女をはべらし肩に手を回して、楽しそうに談笑していたのだ。

なんやねん……あいつ。

くだらん嫉妬だと分かっ、いても腹は立つ。

「司法書士のお仕事って大変なんですか？」

ニコリとホステス顔負けに明るく笑っ、鳴砂は隣の男に身を寄せ。ビール瓶を手にとり男のグラスに向けた。

男も笑い、話し始める。

身体のラインをなぞるように男の手が鳴砂の腰に回る。

遠くで談笑していたヤクザが、笑顔を凍りつけたまま目を細めて、くわえている煙草に手をやった。

その後も九鬼が煙草に手をやる度にこちらを見ているのを感じる。が、断固として視線は合わせてやらない。

それどころか、向こうからもよく見える仕草で隣の男と携帯の赤外線を使ってアドレスの交換をしてやった。

この後二人で飲みに行こうという誘いはさすがに断ったが、もらった名刺は恋人からも見える位置で財布にしまった。

向こうで笑っていた男の顔が徐々に面白くなさそうに苛立ち始める。

男とはいえ恋人である自分の目の前で、女の肩に手を回してイチヤついていた九鬼が悪い。その決然たる思いのもとに宣戦布告。相手に見せ付けるべく隣の男に急接近した。

そう。今思えば、それがいけなかった。

接触感染（上）（後書き）

お久しぶりでございます 16です
ずいぶんと寒くなりましたが、皆様お元気でしょうか？

活動報告にも書かせて頂いた通り、もう文章が大スランプでして……、イラストの方にばかり逃げておりました。

書く！と断言していた「堕ちます」の番外SSを書いてみると、驚くほど面白くないものに。まあ、いつもそうなのかもしれないませんが…… A

本当は11月中に今まで書いたお話三作の番外をそれぞれ書こうと意気込んでいたのですが、脳ミソが仕事の方で容量いっぱいになってしまいました、全然良い話が浮かびません。(´・`´) ウワアアアン！

なので、辛うじてアイデアが浮かぶ新作や、今回のような気の抜けた番外をアップさせて頂こうと思います(´・`´)； 既に書きあげましたダメダメな番外SSは……ゴメンナサイ、拍手等のオマケ文章とかになりそうです。その他の番外なんかも、まあ年末年始やクリスマスイベントに乗じて思いついたら書くつもりです

今回は、スランプスランプと泣き言を喚いていても書かない事は進まないだろうって事で、一番書きやすい前作のキャラを引っ張り出して参りました(^^;))

ということ、今日からゆっくりではありますが、大した内容もない番外SSを更新して参ります(´・`´)。(´・`´)。

全三話。もう書きあがっておりますが、三日おきくらいに静かな更新をします。

拙い文章ではございますが、少しでも皆様の現実逃避に役立つ事

を願っております。> ((<

接触感染（中）

「おい、歩……。俺、喉痛い。頭もガンガンする」

重たい身体でベッドから抜け出し、リビングへ行こうとドアへ向かったところで、先程まで隣で寝息を立てていたヤクザが鳴砂を呼び止め、呟いた。

サイドテーブルの目覚ましを見ると、バイトの面接二時間前。

「え……。なんで？」

薄暗い室内で、眠たい顔をしかめながら振り返る。

「なんでで。風邪やる……。なんか熱っぽいわ」

手首を額に乗せて天井を見つめながら真剣に言う男の姿が、この日最初の笑いを誘った。

「風邪？ さあ、それだけは無い思いますけどねえ……」

歩いていたらUFOが落ちてくるくらいの確率で、それは無い。

どう考えても一年中半袖半ズボンで運動場を走り回っていたタイブだ。

「なんでや」

そんなに真剣に聞き返されると、阿呆だからですとは言えなくなつた。

「おい。どこ行くねん」

「体温計取りに行くんでしょう。どこにあるんですか？」

「ない。そんなもん」

面倒臭いことになった。

こんな忙しい日に限って……絶対わざとや。

溜息をつきながらベッドに近づき、上半身裸、下着姿で寝ている男を上から見下ろす。

「だからパジャマ着て寝んとあかんって言ったのに……」

「偉そうに言うな。どの口がほざくんじゃボケ。」

お前が服着せてくれと甘えるから着せたったら、こっちが疲れて裸で寝てしもたんやんけ」

またそういう事を言う。情事の後の甘いわがママを、一夜明けてから責められても困るのに。

掌で前髪をかき上げ、ムツとした表情の強面に額を合わせると、大好きな人の香りが一瞬の軽いめまいを促す。

「あ……ほんまにちよつと熱あるかも……」

予想に反して九鬼の額は鳴砂の体温よりもはるかに熱かった。

この分では、ある日突然空からUFOが降ってくる日もそう遠くは無い。

「ほんなら……俺、面接の帰りに薬買って来ますわ。だから今日は一日大人しく、んうっ……！」

表情も見えない至近距離のまま後頭部が固定されたと思ったら、鳴砂の口にいっぱいに異物が侵入する。すんなりと唇を割って入ってくる高熱の粘膜が、乱暴に唾液をひと掻き混ぜ。

「んん　ちよつ……ちよつと！　何してんスカ　風邪うつるやないですか！？」

深く繋がるうとする唇を引き剥がして、袖で口を拭う。

「うつるわけ無いやろ。この世を揺るがす程の阿呆やのに……」

畜生。気使わんと、俺もさっき言うといたらよかった。

この男に気を使うと後々必ず後悔することになる。殴られても言いたい事はその場で言おうと決心した。

「九鬼さん……。言うたでしょ？ 俺、今日の面接が上手くいったら、明日からバイト始まるんです。こんな大事な時に、風邪なんかひいてる暇ないねんから……」

鳴砂が口を尖らすと、九鬼は鼻で笑って寝返りを打つ。

こちらに向けた広い背中の上、肩甲骨の左半分に、暗い中でも鮮やかな鬼の錦絵が鳴砂を睨み付けていた。

「ああ、そうか。よう分かった。」

お前そうやってバイトで金稼いで、ある日俺の前から姿を消すつもりやる？

昨日もあの司法書士のガキと身体寄せ合って仲良うしとつたしなあ。やっぱり逃亡の手引きでもしてもらってたんと違つか？」

煙草を取り出してくわえ、空になった箱をぐしゃりとやる。

「またその話……？ その話やったら、昨日あれから決着ついたやないですか。アドレスも消したし、名刺も捨てた。俺の気持ちはちゃんと伝えたでしょう？」

決着がついたというよりは、無理やりつけさせられたという方が正しい。それも話し合いの末ではなく、恋人が選んだのはずいぶんと強引なやり口だった。

くだらない嫉妬に駆られてヤクザを本気で怒らせたのがいけなかったのだ。

思い出すだけで顔面が熱くなる、昨晚のベッド上。痛くて、苦しくて、その何倍も気持ちよくて、涙声で謝りながら手放しの意識を何度も消失させられた。

その狂おしい快樂の主たる原因が、ただの激しい性交渉のせいではなく、相手の男に対する特別な感情のせいなのだから、実にたちが悪い。

つくづくどうしようもないと鳴砂は自分に呆れる。

相手が思っている以上に、自分が思っている以上に、気付かぬう

ちに良からぬ病に感染してしまっていた。

恋の病、不治の病。そんな麗しいものではない。

もつと浅ましく、淫らで欲深い。毒々しい症状を呈す病。

離れていれば、不安や胸部の圧迫感に襲われ、近づけば、それはアルコールのように発熱を促し毛細血管を隅々まで広げる。触れてしまつと、循環動態が見事に即反応。全身が灼熱の熱感に火照る。

動悸、めまい、喉の渇き。感染者の意思を無視して、症状は徐々に悪化の一途をたどっていた。

「ほんなら何で風邪で寝込む恋人見捨てて出掛けられるねん。

普通は付きつきりで看病とかするん違うんか？

お前は二枚舌やかななあ。ホンマは俺の事、金づるくらいにしか思てへんのやる」

子供のように不貞腐れた表情で吐き捨てる九鬼は、毒づく口に手をやつて、半分も吸い終わらない煙草をサイドテーブルの灰皿に押し付け吸殻に変えた。

極道などという、一般的な社会からは程遠い世界に身を置きながら、この男は堂々と普通という言葉を使って甘い恋人生活を要求する。脳ミソが感染でやられている鳴砂に言わせれば、そういう所がまた憎めない。

うつ伏せに肘をついて、九鬼がりモコンをテレビに向けた。

高らかにマイクエコーのかかった声を出すテレビ画面に目をやると、いいとも選手権がもう終わろうとしている。

やばい。もうこんな時間や。

「お前、明日の朝九時にアルタ前に集合せえや。びっくり素人さんのコーナーに出してもらえ。極道を恐れず何度も騙す、怖いもの無しのびっくり素人として……」

センスの無い嫌味を言うヤクザの相手をしている暇は無かった。

鳴砂は溜息をつく。

付き合ってからまだ一月も経たない短い関係。

ただ、その短期間に身体を重ねた回数、一緒にいた時間、低レベルな会話で笑い合った回数。相手との関係性を時間の長さでは無く、過ごした時間の濃さで測るなら、鳴砂にとって目の前の男との関係は限りなく深い。

それこそ相手が言いたい事、自分に言わせたい事までもが、瞬時に分かっってしまう程。

すべすべとした広い背中に触れ、ゆっくりと頬を寄せる。

微妙な表情をする赤鬼の絵と間近で目が合う。刺青の表面だけが少しヒンヤリと冷たい。

「触んな」

振り向きもせず吐き捨てる男の背筋を、人差し指でなぞる。

「九鬼さん……。俺の気持ちはちゃんと伝えたでしょう？」

俺は九鬼さんのことが好きで好きでどうしようもない。気がついてたらいつも恋焦がれてる、どうしようもなく好きで仕方ないんです。この期に及んで、これ以上俺を夢中にさせてどないするつもりです？ 女と話してるだけで後ろから刺されたいんですか？」

これ以上話をこじらせる事無く速やかに出掛ける準備に移るため、相手が聞きたかったであろう鳴砂の本心を素直に伝えた。

口から出任せ、心にも無い嘘八百を並べる方がまだ楽だと、鳴砂は滅入る。別に隠し立てする訳では無いが、好き好んで恥ずかしい本音を口にしたいくは無いものだ。

「ふうん」

背中から両腕を回し面を覗き込むと、九鬼は無表情で目を細め、澄ました返事をする。鳴砂がどれだけ気持ち伝えようと、この男が本心を言葉で返してくれることはまず無い。

皮膚の張った首筋に忠誠のキスを何度も落としていると、途端視界がぐるりと一回りし、一瞬目の前に広がった天井を遮る黒い影が全身に重く押し掛かる。煙草の匂いが口元を荒っぽく塞ぎ、空気を奪う。

スウェットの中に潜り込む大きな手が、鳴砂の弱点を迷い無く確実に撫で上げる。

「やつ！ ちよっ……」

脇腹を這う九鬼の手を服の上から押さえ込むが、それくらいで止められる程度の力なら、昨日の晩はあんな事にはならなかった。

安定した時間を淡々と進めるテレビの中で、大物演歌歌手が音楽に合わせて大きなサイコロを振っているのが見えた。

やばい。もう、ごきげんよう始まった。

改めて気持ちをちゃんと伝えれば話が早く片付き、面接に行く用意ができると思っていたが、逆効果だったかもしれないと後悔し始めた。

「ね、ねえ……九鬼さん？ 熱あるんやし、そういう事は我慢しはった方がええんと違います？ 風邪、余計にひどくなりますって……」

俺も、もう用意せなあかん時間やし……」

柔らかな口調で制止を要求するが、鳴砂の身体に覆いかぶさる熱が冷める事は無い。

「あかん。やらせろ」と荒々しく服をめくり上げる。

覆いを剥がれた肌が、昨晚の乱れた記憶を勝手にリロードし始め、熱を持つ。

男を止めようと冷静な台詞を吐いていたのは束の間。身体に続き精神までもがすぐに高揚し始め、吐く息が深く速くなる。

感染した体内で何かが増殖し、自己規制システムが破綻。恥ずかしげもなく漏れ出す艶めいた吐息。

いつもよりも熱い男の肌が、余計に症状の悪化を加速させていく。

「ああ……んっ……あっ、そこ……」

仰向けに背を反らせ、潤う脛をギョツと閉じて、酔う。

くったりと首を傾げたまま男の熱い指を口とは別の器官で舐め取っている。違う使用目的で備わったはずの消化器官が、今は甘いよだれを溢れさせ、新しい六番目の感覚として体内で蠢く悪戯な刺激を入電し続ける。

「あっ……」

不意に指の感触が消えた。

充分に火照った身体が、次に迎え入れるものを想像して煮えたぎり、嬉しそうによじれた。

「ほんなら、今日はここまでやな……。やめて欲しいんやろ？」

鳴砂の顔の横両側に手を付き、真正面から見下ろす男が、平気な顔で有り得ない事を冷たく言い放つ。

「えっ……やあ。なんで、そんな意地悪なこと……九鬼さん……」

うろたえ見上げた恋人の顔が完全に怒っている事に気付く。

なだめる様に男の二の腕に指先を滑らせる。すがり付くような表情で、悩ましく首を傾げ、なまめかしい涙目で最大限に誘う。

内心不安を募らせながらも、自分を焦らせ惑わす太い指一本一本に、舌を見せ付けるように絡ませて、吸い上げ甘噛みする。

「早く……入ってきて、下さ……い」

切なげに小さく囁くと、恋人の顔が僅かに歪んだ。

「お前……卑怯やぞ」

熱い熱い。バイトの面接、怒涛の一時間十分前。

接触感染（中）（後書き）

今日（もう昨日）は平日なのに久しぶりに仕事が休みでした。って事で、この話を早くアップさせて、他の短編でも一本書いたんで！と張り切っていたんですが、ちらりと寄った人様のBL長編作品にはまり込み、一日読みふけてしまいました……。そして、毎回のことながら自分の力の低さを実感して落ち込むんですね、長編は特にそのダメージが大きい（-|-;）微力を尽くして精進したいと思います（-|-;）ノハイ

接触感染（下）（前書き）

BL要素の性描写が含まれます。苦手な方、15歳未満の方、義務教育中の方はご遠慮下さい。

接触感染（下）

はあはあと息を荒げ、繋がったばかりの身体から熱を逃がす。

小さく窮屈な中を押し広げ入って来た熱によって、体内も思考の隙間も全てが一杯に満たされ、悔しくも安堵している。

ぎゅっと目を閉じ、全神経を一点に集中した。

「ああア……すごく、熱いい……九鬼さんの……」

目の前の肩に頬をすり寄せる。

恋人の背中と後頭部に腕を回して、更に身体を密着させる。

足の指先で触れる男の肌をなぞり、からませる。

もう絶対に離さないと、病的な高熱を持った相手を捕食者のように締め付ける。

「あつ、ああツ、アつ……ん、凄い……いい……。す、きい、九鬼さつ……ん……だい、好きい……ッ」

身体が浮くほど揺さぶられる度に、また相手が欲する言葉が簡単に口をついて出る。

何度も何度も、好きだと、もっと欲しいと相手を求める。

いつから行為の最中に、こんなくだらない事を口走るようになったのか。恋人の恥ずべき性癖がしっかりと鳴砂自身に定着しつつあった。

口を塞ぐ荒い息。マルボロのメンソール。

一定の速いリズムで、乱雑にシーツの皺を増やしていく。

テレビの音が近くて遠い。

この瞬間も絶え間なく生まれ続ける新しい細胞の一つ一つが、男

の匂いを記憶していくのを感じる。
染まっていく。染められていく。
絡む指先から、汗ばむ熱い肌から、唾液から、粘膜から、着実に
感染していく。

熱は高温から低温へ速やかに移動する。

内側からも外側からも流れ込んでくる男の熱量で、鳴砂の体温が
急上昇。体温計をくわえれば、きつと目に見える速さで水銀が昇る
だろう。

熱力学に従順な、つながった一つの物体が、熱平衡を保つべく激
しく揺れて熱を分け合う。

どれくらい喘ぎ続けていただろうか。まだ激震の余韻が残る不
安定な視界の中で、顔の横にある健康的に浮き出た鎖骨を指でなぞ
っていると、恋人が決まり悪そうに息を浅く吐いた。

「バイトの面接、よかったんか？」

知らぬ間に古いドラマの再放送が始まっている。

横目に映る時計を見ると、面接時間まであと二十分。

「ひどい人……こんな身体にしといて……。行ける訳ないって、分
かってるくせに……」

怒る訳でも無く鳴砂は小さく呟いた。

バイト先はマンションから比較的近い場所を選んだので、今から
急げば間に合う。

慌てて部屋を飛び出すのもいい。ただし、激しく責められた身体

を引きずり、首にいくつもキスマークを付けた脳みそシャツフル男を雇う覚悟が面接官にあればの話だ。

九鬼が枕元のリモコンをつかむ。

テレビの画面が黒い横一本線に圧縮されて消えた。

頭を乗せていた九鬼の肩が大きく動いて体制が変わる。横になつたまま向き合い、至近距離で顔を覗きこまれた。優しいキス。

音を立てて触れるだけで去っていく。

「歩……」

静かな低い声、いつになく真剣な表情。嫌味なくらい整っていて、目のやり場に困る。

「お前、なんで……急にバイトなんて始めるんや。

今の暮らしに何か不満でもあるんか？ 金銭的に苦労かけた覚え

は、俺、無いけどな……」

「そつ、そんなんと、違うよ……！」

初めて不安を口にした恋人に、頭を浮かせ慌てて否定する。

「ただ、ちょっと……自分でも働いてみようかなって、思っただけ……」

正面を直視できない視線が泳ぐ。消え入る声に説得力が無い。

本当は、恋人にクリスマスプレゼントを買ってあげたいから。恥ずかし過ぎる真実を言えれば、どれだけ楽だろうと眉を寄せる。残念ながら今鳴砂の口座に残る金は、前の恋人からもらった金と、現在の恋人に世話してもらっている金。人にプレゼントを買うにはあまりにも相応しくない種類の金だ。

今からでも、九鬼が運転手を必要としない週末にバイトすれば、

少しでもまともなプレゼントが買えるだとうと、高校生よろしく一途な思い付きをしたのが一週間前。

九鬼の心配そうな視線を避けて眼を伏せていると、頬を大きな掌が包み込む。同じ熱さの体温。

「歩……。俺は……。ホンマは、怖いねや。

お前が新しい世界を知ったら、そっちに行ってしまうそう……。そうだったら、俺はよう追って行けん。お前と違って、俺はこの世界でしか、生きていかれへんから……」

素手で心臓を鷲づかみにされたような圧迫痛が胸部を襲う。

「……。九鬼さん……。絶対、熱、あるわ……。俺が九鬼さんから離れるやなんて。そんなこと……。あるはず無いのに……」

初めて聞くヤクザの弱々しい声。怯える子供のような表情。

またこの男から離れられない要素が次々と増えていく。

いたたまれない気持ちで慌てふためき、男の首元に顔をうずめた。

「なあ、歩。

俺はもう、お前がおらな、あかん……。

やりたい事はしたらええけど、頼むから……。頼むから、俺から離れんといってくれ……」

恥ずかしげもなくそんな台詞を吐く男が、逆にこちらを落ち着かなくさせる。

どんな顔してそんなことを言うんねん。きつと脳ミソが瞬時に溶解するほど優しく寂しそうな顔をして

いるに違いない。斜め上にある男の顔を仰ぐ勇気が出なかった。

熱のせい。風邪のせい。

医学的におかしい。

いつもはそういった感情を表に出さない男を狂わせるものが、一時的な炎症性のウイルスではなく、自分のせいであってほしいと淡く願う。

「す、好きって……ちゃんと、口で言ってくれたら。ずっと、一緒に……いてあげる……」

顔を胸元に埋めたまま拗ねたように呟く鳴砂の要求を、九鬼はそんな事でもいいのかと笑った。

九鬼にはくだらない事でも、自分にとっては重要な事なのだと、また少し腹が立つ。ベッドの中でうわ言のように口走る以外では、ちゃんと言ってもらったためしが無いからだ。

九鬼の唇が耳元に近寄ってきて、薄い隙間から一瞬息を吸うのが聞える。

耳の縁に唇を触れさせたまま直接体内に注がれる熱い吐息と待ち望んだ言葉を、目を瞑り身体いっぱい吸い込んだ。

脳ミソが溶けて崩れる。全身の力が抜ける。

心臓が一度大きく弾み、毛細血管が開き切る。

身体のどの部分に触れられるよりも、ずっと性的に感じた。

ずるい……。するいよ、九鬼さん。

身体が燃えるように熱く、肌がこげる。

ずっと喘ぎ続けていたせいか喉がひり付く。

充足感を伴う弱い頭痛。

全身に著明に現れた炎症反応が、新たな感染を告げている。

「歩は……？ 歩は、誰が一番好きなんや？」

恋人は優しく誘うように、また分かり切った事を聞きたがる。

耳にかかる息さえ敏感に感じ取る自分の弱さに、目を閉じたまま眉をひそめた。

卑怯者。

そう思うことが、既に負けを認めている。

「そ、そんなん。決まってるやないですか……。俺も……」

また相手が望む一言を口にしようとして唇を開きかけて、ふと止める。異変に気付き、薄目を開けた。

いつしかヒンヤリと感じる九鬼の肌。いつもとは違う指先の熱感。悪寒、鼻声、咽頭痛。

久しぶりに思い出す、懐かしい感覚。

「俺も……。俺も……。あの、九鬼さん……。？ なんか……。鼻水出てきた」

「完」

接触感染（下）（後書き）

はい。風邪には気をつけましようって話でした。

スミマセン大した内容も無く、意味不明に三話にも。期待して下さった方ごめんなさいm（| |” m（

最近また、ちらりと寄った人様のBL長編作品にはまり込み、一日読みふけてしまいました……。そして、毎回のことながら自分の力の低さを実感して落ち込むんですよね、長編は特にそのダメージが大きい（- | - ;） 微力を尽くして精進したいと思います（- | - 。）ノハイ

さて、次は何を書きましょうか……？（ 聞いちゃった……）

また活動報告でお知らせさせていただきます

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9747i/>

できん相談 笑えん冗談[番外]

2010年10月20日18時58分発行